

「人」を表す斜格名詞句の構文的機能 ——中高ドイツ語における「受け手中心の出来事表現」——

湯 浅 博 章

1. はじめに

中高ドイツ語では、現代ドイツ語と比べて非常に多様な非人称表現が用いられている。その中には現代ドイツ語の統語的知識では理解することの難しい構文も数多く見られるが、特に (1) ~ (4) のような無冠詞の名詞と〈状態〉を表す *sîn*、事柄の発生を表す *werden* といういわゆる *Kopula* 動詞が結合した構文はその代表的なものの一つである。

- (1) a. ich sach wol, im was an mich zorn, (Iw. 702) ¹⁾
(Ich merkte wohl, dass er über mich erzürnt war.)
b. dô sluoc ers' alle widere, wand' im was vil zorn: (NL. 1895: 3)
(Damit trieb er alle zurück; denn er war sehr zornig.)
- (2) a. des wære in beiden nôt / vür den êwigen tût. (Gr. 761-762)
(Dessen bedürftten sie beide zur Rettung vor dem ewigen Tod.)
b. nâch dîner minne ist mir sô nôt, (Er. 5890)
(Nach Deiner Liebe verlangt mich so sehr.)
- (3) a. allen sînen degenen reden er verbôt / iht mit übermüete, des im wære leit. (NL. 123: 2-3)
(Allen seinen Leuten verbot er, irgend etwas Überhebliches zu sagen, das den Gast hätte beleidigen können.)

- b. Dô wart der küneginne vil rehte geseit, / daz ir boten niht
enwurden. von schulden was ir leit. (NL. 1848: 1-2)
(Der Königin wurde wahrheitsgemäß berichtet, daß ihr Trupp
nichts erreicht hätte. Das mußte ihr leid tun.)
- (4) a. vrouwe, daz alle iuwer nôt, / die iu durch sînen übermuot / der
grâve Âliers lange tuot / und noch ze tuonne willen hât, / der wirt
iu buoz unde rât, / ob er von uns wird gesund. (Iw. 3408-3413)
(Herrin, daß Ihr aller Eurer Drangsal, die Euch in seiner Anmaßung
der Graf Aliers seit langem zufügt und weiter zuzufügen willens ist,
sogleich ledig werdet, wenn er durch uns geheilt wird.)
- b. er sprach: nû enist des niht rât, ich enmüeze von iu scheiden. (Gr.
214-215)
(Er sprach: ‚Es hilft nun nichts, ich muß von euch scheiden.)
- (5) a. an sînem dienste lac gewin, / der wîbe minne und ir gruoze: / doch
wart im selten kumbers buoz. (Pz. I, 12: 12-14)
(Sein Ritterdienst trug ihm also der Frauen Liebe und Gunst ein,
doch von Liebesleid wurde er nie erlöst.)
- b. dar nâch wirt im es buoz. (Er. 5673) (Später wird das wieder
besser.)

これらの構文にはいずれも無冠詞の名詞 (zorn, nôt, leit, rât, buoz) 以外に
動詞の主語になる成分が無く、無冠詞名詞を主格主語とする統語的解釈も成
り立つと考えられるが、中高ドイツ語の文法書や辞書では無冠詞名詞は述語
であり、主格主語の欠落した非人称の文と説明されている。

筆者はこれまでになぜこれらが非人称構文と解釈されるのか、これらの構
文が中高ドイツ語の文法体系の中でどのような役割を担っているのかについ
て考察を進めてきた。その結果、後述するように無冠詞名詞の位置に形容詞
述語 (Prädikativ) が用いられた同様の構文が存在すること、無冠詞名詞が

もはや名詞と考えられていないような例も見られることから、やはりこれらの無冠詞名詞は述語として用いられていたのであり、これらの構文が非人称構文になっていることを確認した。そして、これらの構文には必ず〈こと〉を表す属格名詞句もしくは〈人〉を表す与格名詞句のいずれか、または両方が用いられ、この〈こと〉もしくは〈人〉と述語との間に叙述関係が成り立っていることを示した。また、こうした特徴は Kopula 動詞に限られる訳ではなく、(6), (7) のような *gân* や *geschehen* という自動詞を用いた非人称構文にも当てはまること、さらに属格名詞句の位置に主格名詞句（この場合には、もちろん非人称とはならない）が現れる構文や (8) のように無冠詞名詞の位置に *ze* 不定詞句が現れる構文も見られ、これらの Varianten も併せて、中高ドイツ語においては〈行為〉ではなく〈出来事〉を表す一つの文タイプと捉えられることを示した。²⁾

- (6) a. *daz ich sô sêre weine, des gêt mir wærlîche nôt.* (NL. 921: 4)
(Daß ich so sehr weinte, ist ein Zeichen meiner großen Bedrängnis.)
b. *weder er sî lebende oder tôt? / do ersiuftu si, des gie ir nôt.* (Gr. 3883-3884)
(ob er noch lebt oder ob er tot ist? Da mußte sie tief seufzen.)
- (7) a. *si empfiengen dâ genuoge, den sît leit von ir geschah.* (NL. 1341: 4)
(Viele Leute begrüßten sie dort, denen später Leid von ihr geschehen sollte.)
b. *durch got, wiest mir von ime geschehen / sô leide und alsô swâre!*
(Tr. 1008-1009)
(Bei Gott, wie ist mir durch ihn Schmerz und Not widerfahren!)
- (8) a. *ich unsæliker man, / daz sî mîn ouge ie gesach, / dô uns ze scheidenne geschach.* (Iw. 328-330)
(Wie war ich unglücklich, sie je gesehen zu haben, als wir Abschied nehmen mußten.)

b. im enist ze weinen niht geschehen: (Gr. 2338-2343)

(Es ist nichts geschehen, was ihn zum Weinen bringen könnte.)

こうした「出来事表現」は〈状態〉や〈ことの生起〉を表す自動詞と無冠詞名詞の位置に現れる成分による述語、〈こと〉の属格名詞句もしくは〈人〉の与格名詞句で構成されるが、〈人〉を表す与格名詞句と〈こと〉を表す属格名詞句が共起することも多く、述語によっては〈人〉を与格ではなく属格で示す構文や対格で示す構文も見られる。こうした点を考慮に入れると、斜格で表される〈人〉と〈こと〉を表す成分はそれぞれ一定の機能を果たしていると考えられる。〈こと〉を表す成分は後に述べるように述語の表す状態・出来事の「対象」として用いられるが、〈人〉を表す成分の意味・機能は十分には明らかになっていない。(Vgl. 湯浅 2021:56-61) そのため、本稿では「出来事表現」において斜格名詞句で表される〈人〉が構文上どのような機能を果たしているのかを明らかにすることを試みたい。また、「出来事表現」が中高ドイツ語の文法体系の中でどのような文タイプとして機能しているのかについても考察することにした。

2. 「出来事表現」の特徴

2. 1. 「出来事表現」の述語

まず、本稿の考察対象とする「出来事表現」にはどのような特徴があるのかを確認しておきたい。上に挙げた(1)～(6)の例のように「出来事表現」には主格主語の位置に主に無冠詞名詞が現れるが、これらの無冠詞名詞は主語として用いられているのではなく、述語(内容語)(Prädikativ; Prädikatsnomen)として *nôt sîn* / *nôt werden* / *nôt gân* のように動詞と一体となって述語を形成していると考えられる。それは、(2b)のように副詞が付加されたり、(9a)のように比較級形が見られるなど、形容詞を述語と

する (9b) のような文との平行性が見られるからである。(Vgl. Paul/Klein/Solms/Wegera 2007 : 317ff, 360f. ; 湯浅 2019 : 47-50)

(9) a. Dône kunde Gîselher nimmer zorneger (zorniger;AC) gesîn. (NL. 2044, 4)

(Giselher konnte nicht mehr wütender werden als jetzt.)

b. dô tete sî als ir wære gâch (Iw. 3612)

(Da tat sie als hätte sie es eilig)

(7) のように *geschehen* と用いられた例は、形態統語的 (morphosyntaktisch) には無冠詞名詞が主格主語となっていると考えられるが、文意味と機能を考えると与格名詞句で表される〈人〉に無冠詞名詞の表す状態が起こることを表している。そのため、文意味構造としては他の動詞の場合と同様であり、無冠詞名詞は *geschehen* とともに〈人〉に「予期しないことが起こる」(Vgl. Grimm: Deutsches Wörterbuch, Bd.5, Sp.3841) という意味を表し、「述語」として機能していると捉えることができる。また、*geschehen* が用いられるのは「(予期しないことが人に) 起こる」という語彙の意味を付け加えるとともに、無冠詞名詞の表す状態が生起するという起動相 (inchoativ) のアスペクトを表すためだと考えられる。〈状態〉を表す *sîn* は継続相であるが、その〈状態〉が発生することを示す場合には非継続アスペクト (変容相) を表す *werden* が、その〈状態〉が続いていることを表す場合には進行相の *gân* が用いられ、これらは *sîn* の Varianten になっている。こうした *werden* や *gân* と同様に、*geschehen* も Variante として「出来事表現」を構成している。

このように、話者の事柄に対する捉え方を表すアスペクトの違いによって述語動詞の使い分けが行われていると考えられるが、いずれの動詞の場合も無冠詞名詞と結合して文意味・叙述内容としては「述語」を形成している。こうした構文上の働きは、(8) のように *ze* 不定詞句と結合した場合にも該

当する。中高ドイツ語の *ze* 不定詞句は形態や性質が現代語の *zu* 不定詞句と異なるとは言え、文中で果たす機能については基本的に同じであると考えられる。(Vgl. Paul/Klein/Solms/Wegera a.a.O.: 314ff.) したがって、*ze* 不定詞句が無冠詞名詞の位置に現れる場合には、形態統語構造から見れば述語動詞に対する主格主語と見なされる。けれども、文意味構造から考えると *ze* 不定詞句は与格名詞句によって表される〈人〉の行う〈行為〉を表していて、述語動詞はその状況が生起することを示しているだけである。同じ *geschehen* を使った (7a) と (8a) の例を見直してみると、(7a) は「彼らに苦しみが起こる／彼らが苦しむ状態が生じる」という意味で、*leit* は〈こと〉が発生した結果の〈状態〉を表している。これと同様に (8a) は与格の *uns* に「別れる時が訪れた／(私たちが) 別れなければならないことが起こった」という意味で、*ze scheidenne* は *uns* に生じた〈出来事〉を表しているが、*scheiden* は *uns* が結果的に行う〈行為〉である。したがって、これらは同じ文意味構造を成していると見なすことができる。

- (7) a. *si empfiengen dâ genuoge, den sît leit von ir geschah.* (NL. 1341: 4)
 (Viele Leute begrüßten sie dort, denen später Leid von ihr geschehen sollte.)
- (8) a. *dô uns ze scheidenne geschach.* (Iw. 328-330)
 (Wie war ich unglücklich, sie je gesehen zu haben, als wir Abschied nehmen mußten.)

このように、与格で表される〈人〉の置かれた〈状態〉を表す場合には無冠詞名詞が用いられ、〈行為〉を表す場合には *ze* 不定詞句が用いられる。これらはいずれも「述語」として機能しているが、その対象となっているのは属格名詞句で表される〈こと〉もしくは与格名詞句で表される〈人〉である。

2. 2. 叙述の対象

「出来事表現」の構文には、属格名詞句等で現れる〈こと〉を表す成分と与格名詞句等で表される〈人〉を表す成分のいずれか、あるいは両方が必ず現れる。これらの〈人〉や〈こと〉は「何について／誰について述べるのか」を表す対象として機能している。(湯浅 2021:56-59, 64f.) こうした「叙述の対象」(Gegenstand der Prädikation) としての役割が、属格名詞句や与格名詞句の一義的な役割であると考えられる。また、多くの場合に非人称となっていることを考慮すると、主格名詞句はこの構文では必ずしも必要とされていない。したがって、「出来事表現」の述語がまず必要とするのはこれらの〈こと〉もしくは〈人〉を表す成分であり、これらが第一の必須成分となっている。

〈こと〉を表す属格名詞句と〈人〉を表す与格名詞句のどちらが「叙述の対象」となるかは、述語によって異なると考えられる。上述の(1)～(5)の例で考えると、(1a), (1b) の *zorn sîn* 「怒っている」という状態は〈人〉の属性であり、どちらも与格代名詞 *im* で表された〈人〉が「叙述の対象」となっている。この *zorn sîn* のように〈人〉の感情を表す述語の場合には〈人〉が「叙述の対象」となり、〈人〉が関わる〈状態〉を表すとしても、(2)の「必要である」という意味を表す *nôt sîn*、(3)の *leit sîn* 「(人にとって) 苦難の原因となる」、(4)や(5)の *rât sîn* や *buoz sîn* 「(人が) 救われる／助かる」対象は〈こと〉であると考えられる。(以下に、それぞれの文例の該当箇所を再掲する。)

- (1) a. *ich sach wol, im was an mich zorn, (Iw. 702)*
 b. *dô sluoc ers' alle widere, wand' im was vil zorn: (NL. 1895: 3)*
- (2) a. *des wære in beiden nôt / vür den êwigen tôt. (Gr. 761-762)*
 b. *nâch dîner minne ist mir sô nôt. (Er. 5890)*
- (3) a. *iht mit übermüete, des im wære leit. (NL. 123: 3)*
 b. *von schulden was ir leit. (NL. 1848: 2)*

- (4) a. vrouwe, daz alle iuwer nôt, / ... / der wirt iu buoz unde rât, / ob er von uns wird gesund. (Iw. 3408-3413)
b. er sprach: nû enist des niht rât, ich enmüeze von iu scheiden. (Gr. 214-215)
- (5) a. doch wart im selten kumbers buoz. (Pz. I, 12: 14)
b. dar nâch wirt im es buoz. (Er. 5673)

また、「叙述の対象」となる〈こと〉は、(2b), (3b)のように前置詞句や副詞で現れることもあり、さらに(10)のように主格名詞句で表されることもある。主格名詞句で〈こと〉が表される場合を考慮に入れると、やはり無冠詞名詞は述語であり、主格や属格の位置に現れる〈こと〉が「叙述の対象」であると確認できる。

- (10) a. Dô sprach der fürste Sigmunt: „dîn rede diu ist mir leit,(NL. 56, 1)
(Da antwortete Siegmund, der Fürst: „Solche Rede mag ich nicht;)
b. ir kunden disiu mære nimmer lieber gesîn. (NL. 238, 4)
(Keine Nachrichten hätten Kriemhild lieber sein können.)

このように、〈人〉または〈こと〉を表す「叙述の対象」と述語で叙述内容(Satzinhalt)が構成されるが、多くの例が示すように〈こと〉が「叙述の対象」となる場合でも〈人〉を表す与格名詞句が共起する。こうした与格名詞句等で表される〈人〉がどのような機能を果たしているのかについて、次に考察することにした。

3. 〈人〉を表す斜格名詞句の機能

上述のように、「出来事表現」の叙述内容(Satzinhalt)は無冠詞名詞やze不定詞句と自動詞による述語と、その「叙述の対象」となる成分によっ

て構成されている。〈こと〉を表す成分には属格名詞句だけではなく、主格名詞句や前置詞句、副詞等の変異形が現れるように、〈人〉を表す成分にも与格だけではなく属格、対格の名詞句が現れることもある。ここでは、それぞれの格で現れる〈人〉が構文上どのような機能を果たしているのかについて考察する。

3. 1. 対格

中高ドイツ語においても〈人〉が行う行為を表現する場合には〈人〉を主格主語にして文を構成することが普通であり、〈人〉が対格で現れる場合は他動詞で表される行為の影響を受ける「対象」(affiziertes Objekt)または「被動者」(Patiens)の意味(役割)を担っている。(Vgl. Vogel 2006: 44ff.)しかし、自動詞を用いた「出来事表現」の中にも〈人〉を表す対格が現れる例が見られる。それは、述語に *nôt gân* が用いられた (11) のような場合である。³⁾

(11) a. *des gîe sî michel nôt.* (Nib. Z. 272, 5; aus BMZ)

b. *nû sich ûf werlt, des gêt dich nôt.* (MS 2, 160: a; aus BMZ)

Benecke/Müller/Zarncke の辞書では (11a) に „sie musste es wohl erkennen. / sie konnte es nicht verkennen.“ という現代語訳が与えられている。BMZ によれば、(11a) の文は校訂者によって „*dô gie ir trûrens nôt*“ (NL. 1784, 1) に置き換えられている。こうした点を基に考えると、対格で現れている〈人〉も与格で現れている場合と同様に叙述される事柄が誰に起こったのか、事柄の中心人物は誰かを表していると言えよう。

3. 2. 属格

よく知られているように、中高ドイツ語には目的語として対格ではなく属格をとる他動詞も多い。そうした他動詞の結合価に基づく統語構造に含まれ

る場合を除くと、属格名詞句は基本的に „in bezug auf“ という意味に帰着する「関係」を表すために用いられると考えられる。(Vgl. Paul/Klein/Solms/Wegera a.a.O., 340-344 ; 湯浅 2021 : 56-59) 「出来事表現」に現れる属格名詞句も基本的にはこの意味で用いられていて、それらは上記の (2a), (3b), (4a) のように〈こと〉を表して「叙述の対象」となっている。これらは文頭に位置することが多く、「テーマ・レマ構造 (トピック・コメント構造)」のテーマ (トピック) となっていることも多いが、「テーマ・レマ構造」は発話レベルで作用する現象であり、文意味構造が問題となる構文レベルの現象ではない。(Vgl. Welke 1993: 27-32, 44-54, Polenz 2008: 290-297) このことは、(4b) のように「叙述の対象」がテーマ (トピック) となっていない例が多く見られることから確認できる。

〈人〉を表す属格が現れるのは、(12) のように述語が *rât werden* の場合のみである。

(12) a. *Sit daz dise sint genesen / nâch ir grôzen meintât, / sô wirt dîn alsô guot rât.* (Gr. 3970-3972)

(Wenn nach so großer Freveltat selbst diese gerettet wurden, so wird auch dir geholfen werden.)

b. *Entriuwen, lieber herre mîn, / iuwer wirt vil guot rât.* (AH. 916-917)

(Doch, mein lieber Herr, Euch wird gut geholfen werden.)

この場合には「(人に) 救いがもたらされる／助かる術が生じる」、「(人が) 救われる／助かる」という意味になり、*dîn*, *iuwer* という属格で現れている〈人〉が「叙述の対象」となっている。こうした〈人〉が属格で表される理由は明らかではないが、「人が *rât* を得る」という文意味構造から属格の持つ「所有」の意味が想起されやすいこと、他の述語の場合に「叙述の対象」となる〈こと〉が属格で表されることが多いことによる類推によって、〈人〉

が属格で表されているのではないかと思われる。ただし、〈こと〉が「叙述の対象」となる文で〈人〉も共起する場合には、(4a)の „der wirt iu buoz unde rât“ のように〈人〉は与格で現れる。こうしたことを考慮すると、〈人〉が属格で表されるのは「叙述の対象」としての役割を担うからであり、文の表す事柄が誰に起こったのかを示すという点是对格とも与格とも共通している。

3.3. 与格

既に述べたように、「出来事表現」における〈人〉は与格名詞句の形で現れることが最も多い。そして、上述のように〈人〉が対格で現れる場合も属格で現れる場合も文の表す事柄が誰に起こったのかを表すという特徴が与格名詞句と共通しているということは、〈人〉を表す成分が与格名詞句の意味・機能を基盤としていることを示している。

与格名詞句はそもそも動詞の表す出来事 (Geschehen) が向けられた〈人〉もしくは〈生き物〉を表し、(13)のように他動詞を用いた構文によく用いられる。(Paul/Klein/Solms/Wegera a.a.O., 348f.)

- (13) a. mit maneger kurzewîle man nu die zît vertreip,
wan daz in twang ir minne diu gab im dicke nôt. (NL. 324, 2-3)
(Mit vielerei Unterhaltung vertrieb man sich die Zeit; wenn ihm nur nicht die Liebe so zugesetzt hätte, die ihn oft bedrängte.)
- b. er sprach „niene vürhte dir: / sine tuont dir bî mir dehein leit. (Iw. 516-517)
(Er sagte: „Fürchte dich nicht, sie tun dir kein Leid, wenn ich dabei bin.)

上の例に見られる im, dir は動詞 geben, tuon の間接目的語となる〈人〉を表すため、動詞の結合価 (Valenz) によって必須成分となっていて、geben,

tuon という〈行為〉の「受け手」を表している。しかし、〈人〉を表す与格名詞句はいわゆる「自由な与格」(freier Dativ) や本稿の考察対象とする「出来事表現」のように動詞の Valenz 構造には含まれない用法でも多用されていて、動詞の必須成分なのかどうかを区別することは必ずしも可能ではない。(ebd.) そうすると、動詞の Valenz 構造に含まれない〈人〉の与格名詞句がどのような働きを担っているのかが問題となる。

以下の (14) のように〈人〉の感情を表す述語が用いられた「出来事表現」では〈人〉の与格名詞句は明らかに文にとって必須の成分であり、与格名詞句が無ければおよそ文が成り立たない。これは〈人〉の与格名詞句が「叙述の対象」となっているからであるが、(15) のように与格名詞句以外に「叙述の対象」が存在している文でも〈人〉の与格名詞句が必須成分であるかのように用いられていることは、これまでの多くの例が示している通りである。

- (14) a. er sprach „vrouwe, nein ich, / deiswâr, und ist mir daz nû leit. (Iw. 5860-5861)

(Er sagte: „Herrin, nein, wahrhaftig nicht, und ich bedaure das jetzt sehr.)

- b. dô minnet er sî deste mê, / und im wart nâch ir alsô wê / daz diu Minne nie gewan grœzern gewalt an deheinem man. (Iw. 1605-1608)

(da ergriff ihn die Liebe zu ihr um so heftiger, und ihm wurde so weh nach ihr, daß die Minne niemals größere Gewalt über jemanden erlangt hatte.)

- c. mir tuot (/ist) zorn daz dirre kleine man / alsô lange vor mir wert. (Er. 9191-9192) ⁴⁾

(Es macht mich wütend, daß dieser Kleine mir so lange standhält.)

- (15) a. Wirt er mir lieb, daz ist ein nôt; / wirt er mir leit, daz ist ein tôt.
(AH. 765-766)
(Wird er mir lieb, dann ist das eine Not; und wird er mir leid, so bedeutet das den Tod.)
- b. doch ez im solde wesen zorn. (Er. 4162)
(Wenn es ihn auch zornig machte —)
- c. swâ ich gevolget ir bete, / daz enwart mir nie leit, / und hât mir
ouch nû wâr geseit. (Iw. 2020-2022)
(Wo immer ich auf sie gehört habe, habe ich es nie bereuen müssen,
und auch jetzt hat sie mir die Wahrheit gesagt.)

〈人〉を表す与格名詞句は、いわゆる「自由な与格」も含めて、様々な事柄に関わる「関与者」(die beteiligte Person)の意味で古くから用いられている。(Vgl. Erdmann II, 233-258; Grimm 1989: 812-842) この意味を基にして、(13)のような他動詞構文の間接目的語になると「受け手」の役割を担うことになると考えられる。この「受け手」としての役割は(15a)のように他の〈人〉が「叙述の対象」として現れている文でも認められる。(15b), (15c)のim, mirも„ez ist zorn“, „daz wirt nie leit“という事柄の当事者であり、その事柄の「受け手」となっている。このように、「出来事表現」に現れる与格名詞句は述語動詞のValenz構造に依存しているのではないが、「叙述の対象」と述語で構成される叙述内容の表す事柄を受ける存在として付け加えられていると考えられる。この「受け手」を表すという機能は文レベルで〈人〉を表す与格名詞句が担う機能であり(Vgl. Grimm gbd., 839-842)、他動詞構文から自動詞を用いた「出来事表現」へと用法が拡大したものである。そして、〈人〉に関わる事柄を表す構文では必須成分として用いられていると考えられる。

4. 「受け手中心の出来事表現」の機能

上述のように、〈人〉を表す与格名詞句は「叙述の対象」と述語から成る叙述内容が表す事柄に関わる「関与者」(die beteiligte Person)としてゲルマン語や古高ドイツ語の時代から用いられていた。(Vgl. Erdmann a.a.O.: 233f.)そして、この「関与者」を表す与格名詞句が叙述内容との関係によって「受け手」としての役割を担うことになり、この「受け手」を表す機能が他動詞による「行為文」だけではなく自動詞による「現象文」にも拡大し、「出来事表現」が出来上がったものと思われる。rāt werden や nôt gân のように述語によっては与格ではなく属格名詞句や対格名詞句をとるものもあるが、そうした〈人〉を表す属格や対格も表される事柄の「受け手」を表しており、「出来事表現」に現れる斜格名詞句は総じて「受け手」を表す役割を担っていると言える。しかし、上に挙げた(13)や(15)の例が示しているように、〈人〉を表す斜格名詞句が「受け手」を表すのは「出来事表現」に限られる訳ではない。そうすると、「受け手」を表す斜格名詞句を伴った「出来事表現」は他の構文とは異なる構文的機能を担っていると考えられるが、それは一体どのようなものであろうか。

形態統語構造から考えると、「出来事表現」は多くの場合に非人称構文となるので、主格主語の有無という特徴が他の構文との差異に挙げられるが、上に挙げた(10)の例が示すように「叙述の対象」が主格主語として現れる「出来事表現」も多く見られるため、主格主語の有無という特徴は本質的ではない。そうすると、やはり構文タイプとしての意味と機能に「出来事表現」の特徴と存在意義が求められるべきであろう。文意味から考えると、(13)や(15a)のように〈人〉を表す主格主語((13)のように他動詞による行為文であれば「行為者」を、(15a)のように状態・出来事を表す述語では「対象」を表す)が現れている文は、たとえ「受け手」となる斜格名詞句が存在していても、その「受け手」を中心とした「出来事表現」にはなっていない。その一方で、(10)のように「叙述の対象」となる〈もの・こと〉が主格で現れている文は「出来事表現」となっている。このことから、「出来事表現」となる

かどうかは〈人〉を表す主格名詞句が存在するかどうかに懸かっていると考えられる。両者の違いは「受け手」となる〈人〉以外に〈人〉が現れるかどうかであり、「受け手」以外の〈人〉が主格で用いられると、当該の文で表される事柄の中心人物、つまり「事柄の担い手」(Sachverhaltsträger)は主格で表された〈人〉になる。言い換えると、事柄に関与する〈人〉が「受け手」以外に存在しなければ、当該の文で表される「事柄の担い手」は「受け手」となる〈人〉であり、この「受け手」を中心として事柄が捉えられ、叙述内容が構成される。こうした「事柄の担い手」としての働きを「受け手」が担っているという点に「出来事表現」の特徴が存在すると言える。

形態統語構造の背後に文意味構造を捉え、両者を切り離して考えることから出発して両者の構文形成における影響関係を明らかにした Peter von Polenz の „Satzsemantik“ (2008: 290ff.) に基づいて考えると、話者が当該の事柄に登場する人物のうち、どの人物を「事柄の担い手」に位置づけるかは叙述内容 (Satzinhalt) が構成される叙述 (Prädikation) の段階で発揮される構文的機能であり、「事柄の担い手」として取り上げられた〈人〉に焦点 (Fokus der Aussage) が当てられることになる。Polenz は現代語を基にして、能動文と受動文の変換を例にこの「焦点化」(Fokussierung / Gewichtung) を説明しているが、態の変換だけではなく「逆関係」(Konversen) や「主語の排除」(Subjektschub) という現象にも「焦点化」が見られるという。(Polenz, ebd., 181-193) 「出来事表現」の「受け手」が「事柄の担い手」として取り上げられる現象は、この「逆関係」に相当する。それは、「出来事表現」と同じ事柄を表す表現であっても「受け手」となる〈人〉が主格で表された (16) のような構文と対応しているからである。

(16) a. des wart der herre zornec, unde grimmic genuoc. (NL. 207: 4)

(..., raste er vor Zorn und Wut)

b. Dô sprach der degen rîche: „ob mir mîn leben bestât, / sô sult ir
aller sorgen, frouwe, haben rât. (NL. 375: 1-2)

(Da antwortete der mächtige Krieger: „Solange ich am Leben bin, braucht Ihr, Herrin, keine Sorgen zu haben.“)

c. des kom der küene Dancwart in eine grôze nôt: (NL. 1974: 3)

(Davon geriet der kühne Dankwart in eine schwierige Lage)

これらの文では、事柄の「受け手」となる〈人〉が主格で用いられていて、この主格主語に「事柄の担い手」として焦点が当てられている。つまり、これらの文と「出来事表現」の文は同様の事柄を表し、「受け手」となる〈人〉を中心人物、「事柄の担い手」として取り立てて言語化しているが、表現としては対になる「逆関係」になっている。こうした「逆関係」の構文を基に考えると、同じ事柄、同じ「事柄の担い手」であっても、話者が当該の〈人〉を事柄に主体的に関与する〈人〉として表すのか、それとも非主体的な存在として表すかという点に、(16)のような構文と「出来事表現」の違いが存在すると言える。つまり、「受け手中心の出来事表現」は「受け手」となる〈人〉が非主体的に事柄に関わることで、〈人〉が事柄に予期しないままに「受け手」として関わってしまうことを表す構文となっている。このように、「受け手中心の出来事表現」は事柄の中心人物である〈人〉の身に予期していないことが起こったり、〈人〉が当該の事柄に非意図的に巻き込まれてしまうことを表すための文タイプとして機能していたと位置づけることができよう。

5. まとめと展望

本稿では動詞としての固有の意味の乏しい (inhaltsarm)⁵⁾ 自動詞「sîn / werden / gân / geschehen + 無冠詞名詞 / ze 不定詞句 + 〈こと〉・〈人〉を表す成分」という構成で出来上がっている「出来事表現」について、〈こと〉や〈人〉を表す斜格がどのような機能を果たしているのか、こうした「出来事表現」が中高ドイツ語の文法体系の中でどのように位置づけられるのかと

いう観点から考察を進めて来た。そして、無冠詞名詞や *ze* 不定詞句と動詞が述語を構成していること、〈こと〉・〈人〉を表す成分は述語で表される状態・出来事の「叙述の対象」を構成し、叙述内容 (Satzinhalt) をまとめる役割を担っていることを示した。また、〈人〉を表す成分は主に「関与者」を表す与格名詞句で現れ、これが叙述内容の「受け手」を表す役割を担うようになり、他動詞構文だけではなく自動詞による構文にも用いられることによって、「出来事表現」にも用いられるようになったと考えられることも示した。〈人〉を表す成分が叙述内容の表す事柄の「受け手」を表すという機能は与格だけが担うものではなく、「出来事表現」に現れる〈人〉を表す斜格名詞句に広く当てはまる機能であった。さらに、「出来事表現」の構文が他の構文と異なるのは、話者が事柄を捉えて言語化する際に事柄の中心人物、「事柄の担い手」として「受け手」となる〈人〉を捉え、その〈人〉を中心として事柄を言語化し、その「受け手」の身に予期していない状態・出来事が発生することを表すという点であった。こうして、「受け手」である〈人〉に叙述段階で焦点が当てられ、その〈人〉を中心に事柄を言語化する構文として、「出来事表現」は中高ドイツ語の体系の中で一つの文タイプを構成している。

人間が事柄を把握して言語化する際にはもちろん〈人〉が関与しない場合も多く、その際には客観的に事柄を描写することになるが、〈人〉が関わる事柄であれば誰を中心に事柄を言語化するのかという話者による捉え方が重要になる。現代ドイツ語では „Mir scheint, dass ...“ や „Mich dünkt, dass ...“ のような語法にその片鱗が残っているだけであるが、本稿で扱った「出来事表現」は表現の幅が広く、中高ドイツ語では生産的であったことを考えると、少なくとも中高ドイツ語の時代には〈人〉と事柄の関係をどう捉えるか、「事柄の担い手」としてどの〈人〉に焦点を当てて言語化するのかという話者の捉え方が構文形成に大きな影響を与えていたと言えるであろう。

[註]

- 1) 本稿では、代表的な宮廷叙事詩・英雄叙事詩から用例を採取した。それぞれの出典は、このように作品名を略記して該当箇所（行数）を数字で挙げることにしている。ここでは、Hartmann von Aue の „Iwein“ 702 行目であることを示している。それぞれの作品については、文献表を参照いただきたい。なお、それぞれの用例には翻訳書を参考に現代ドイツ語訳をカッコ内に付けることとする。
- 2) 以上の点の詳細については、拙稿（湯浅 2019、湯浅 2021）を参照載きたい。
- 3) (11) の例はいずれも文法書（Grimm 1989: 289）と辞書（BMZ）に挙げられている例であり、筆者の調べた範囲のテキストには〈人〉を表す対格を用いた「出来事表現」は見られなかった。
- 4) この例については、校訂本の違いによって tuot の場合と ist の場合がある。
- 5) この用語については、Kishitani 1988 を参照されたい。

[使用テキスト]

- Hartmann von Aue: *Iwein*. Text der siebenten Ausgabe von G.F.Benecke, K. Lachmann und L.Wolff(1968). Übersetzung und Nachwort von Thomas Cramer, 4. überarbeitete Auflage. Berlin/New York, 2001. (=Iw.)
- Hartmann von Aue: *Der arme Heinrich*. Herausgegeben von Hermann Paul, neu bearbeitet von Kurt Gärtner, 17., durchgesehene Auflage. Tübingen, 2001. (=A.H.)
- Hartmann von Aue: *Gregorius*. Herausgegeben von Hermann Paul, neu bearbeitet von Burghart Wachinger, 15., durchgesehene und erweiterte Auflage. Tübingen, 2004. (=Gr.)
- Hartmann von Aue: *Erec*. Mit einem Abdruck der neuen Wolfenbütteler und Zwettler Erec-Fragmente. Herausgegeben von Albert Leitzmann, fortgeführt von Ludwig Wolff, 7. Auflage besorgt von Kurt Gärtner. Tübingen, 2006. (=Er.)
- Das Nibelungenlied*. Nach der Ausgabe von Karl Bartsch, herausgegeben von Helmut de Boor, 22., rev. und von Roswitha Wisniewski erg. Auflage. (Deutsche Klassiker des Mittelalters) Nachdruck: Wiesbaden, 1996. (=NL.)
- Gottfried von Straßburg: *Tristan*. Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch. Nach dem Text von Friedrich Ranke. Neu herausgegeben, ins Neuhochdeutsche übersetzt, mit einem Stellenkommentar und einem Nachwort von Rüdiger Krohn, 3 Bde. Stuttgart (Reclam), 9. Auflage. 2001. (=Tr.)
- Wolfram von Eschenbach: *Parzival*. Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch. Mittelhochdeutscher Text nach der Ausgabe von Karl Lachmann. Übersetzung und Nachwort von Wolfgang Spiewok, 3 Bde. Stuttgart (Reclam), 2016. (=Pz.)

[翻訳書]

- Hartmann von Aue: *Der arme Heinrich*. Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch.
Übersetzt von Siegfried Grosse, herausgegeben von Ursula Rautenberg. Stuttgart
(Reclam) , 2001.
- Hartmann von Aue: *Gregorius*. Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch.
Mittelhochdeutscher Text nach der Ausgabe von Friedrich Neumann,
Übertragung von Burkhard Kippenberg. Stuttgart (Reclam) , 2007.
- Hartmann von Aue: *Erec*. Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch. Herausgegeben,
übersetzt und kommentiert von Volker Mertens, Stuttgart (Reclam) , 2008.
- Das Nibelungenlied*. Mittelhochdeutsch/Neuhochdeutsch. Nach dem Text von Karl
Bartsch und Helmut de Boor, ins Neuhochdeutsche übersetzt und kommentiert
von Siegfried Grosse. Stuttgart (Reclam) , 2001.

[参考文献]

- Behaghel, Otto: *Deutsche Syntax. Eine geschichtliche Darstellung*. Bd.3,
Heidelberg, 1928.
- Benecke, Georg Friedrich: *Wörterbuch zu Hartmanns Iwein*. 3. Ausgabe. Leipzig,
1901.
- Benecke, G.F./Müller, W./Zarncke, F: *Mittelhochdeutsches Wörterbuch*. 5 Bde.
Nachdruck der Ausgabe Leipzig 1854-1866. Stuttgart (Hilzel) , 1990.
- de Boor, Helmut/Wisniewski, Roswitha: *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 10.
durchgesehene Auflage. (Sammlung Götschen; 2209) Berlin/New York, 1998.
- Erdmann, Oskar: *Untersuchungen über die Syntax der Sprache Otfrids*. Halle,
Erster Teil: 1874, Zweiter Teil: 1876.
- Erdmann, Oskar: *Grundzüge der deutschen Syntax*. 2 Bände in einem Band,
Nachdruck der Ausgabe Stuttgart 1886 und 1898, Hildesheim (Olms) , 1985.
- Grimm, Jacob: *Deutsche Grammatik 4*, Jacob Grimm und Wilhelm Grimm
Werke. Herausgegeben von Ludwig Erich Schmitt, Abteilung I, Band 13-14, 2Bde.
Hildesheim (Olms-Weidmann) , 1989.
- Held, Karl: *Das Verbum ohne pronominales Subjekt in der älteren deutschen
Sprache*. Palaestra XXXI. Berlin, 1903.
- Hennig, Beate: *Kleines Mittelhochdeutsches Wörterbuch*. 4., verbesserte
Auflage. Tübingen, 2001.
- Homberger, Dietrich: *Das Prädikat im Deutschen. Linguistische
Terminologie in Sprachwissenschaft und Sprachdidaktik*. Opladen, 1993.

- Kishitani, Shoko: *Die Person in der Satzaussage. Beiträge zur deutschen und japanischen Verbalkategorie*. Wiesbaden, 1985.
- Kishitani, Shoko: Verwendungen der inhaltsarmen Verben 'sîn', 'werden', 'geschehen'. In: *Mittelhochdeutsches Wörterbuch in der Diskussion*. Herausgegeben von Wolfgang Bachofer, Tübingen, 1988, S.168-182.
- Lexer, Matthias: *Mittelhochdeutsches Taschenwörterbuch*. 2. Nachdruck der 3. Auflage von 1885, Stuttgart, 1992.
- Paul, Hermann: *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 25. Auflage. Neu bearbeitet von Thomas Klein, Hans-Joachim Solms und Klaus-Peter Wegera, mit einer Syntax von Ingeborg Schröbler, neubearbeitet und erweitert von Heinz-Peter Prell. Tübingen, 2007.
- Paul, Hermann: *Deutsche Grammatik III*. Unveränderter Nachdruck der 1. Auflage von 1919. Tübingen, 1968.
- Paul, Hermann/Mitzka, Walther: *Mittelhochdeutsche Grammatik*. 19. Auflage, 2. Druck. Tübingen, 1966.
- Polenz, Peter von: *Deutsche Satzsemantik. Grundbegriffe des Zwischen-den-Zeilen-Lesens*. 3., unveränderte Auflage. Berlin/New York, 2008.
- Schützeichel, Rudolf: *Althochdeutsches Wörterbuch*. 4., überarbeitete und ergänzte Auflage. Tübingen, 1989.
- Vogel, Petra Maria: *Das unpersönliche Passiv. Eine funktionale Untersuchung unter besonderen Berücksichtigung des Deutschen und seiner historischen Entwicklung*. Berlin/New York, 2006.
- Welke, Klaus: *Funktionale Satzperspektive. Ansätze und Probleme der funktionalen Grammatik*. 2., durchgesehene und überarbeitete Auflage. Münster, 1993.
- 岸谷 敏子：Person（人称）と Subjekt（主語）の関係——言行為の普遍性を求めて——、『ことばを考える3』、愛知大学言語学談話会、東京（駿河台出版社）、1996年、47-85頁。
- 相良守峯訳：『ニーベルンゲンの歌』（全2冊）、東京（岩波書店）、1995年。
- 平尾浩三／中島悠爾／相良守峯／リンケ珠子訳：『ハルトマン作品集』、東京（郁文堂）、1982年。
- 湯浅博章：„ich sach wol, im was an mich zorn“ —中高ドイツ語における無冠詞名詞を用いた非人称構文について—、『Sprachwissenschaft Kyoto』第18号、京都ドイツ語学研究会、2019年、45-62頁。
- 湯浅博章：„im enwære ze weinene geschehen“ —中高ドイツ語における「受け手中心の出来事表現」について—、『Sprachwissenschaft Kyoto』第20号、京都ドイツ語学研究会、2021年、53-71頁。

„Empfänger-bezogene Vorgangsausdrücke“ im Mittelhochdeutschen
– Zur Leistung des Kasus der Person in der Satzbildung –

Hiroaki YUASA

Die vorliegende Arbeit behandelt den Satztyp im Mittelhochdeutschen, der aus den Vorgangsverben wie *sîn* / *werden* / *gân* / *geschehen* und Substantiven ohne Artikel wie *zorn* / *leit* / *nôt* / *rât* usw. sowie dem obliquen Kasus der „Person“ konstruiert ist. In den Wörterbüchern (z. B. BMZ oder Lexer) und Grammatiken werden die Sätze wie in (1) und (2) als eine Art von unpersönlichen Sätzen erläutert; danach sind die Substantive ohne Artikel keine Subjektnominative und die Kasus der „Person“ (meistens Dative) sind die „logischen“ Subjekte. Und von diesen „unpersönlichen“ Sätzen wird in der bisherigen Forschung meistens nur als Redensarten gesprochen.

- (1) a. ich sach wol, im was an mich zorn, (Iwein 702)
b. des wære in beiden nôt / vür den êwigen tôt. (Gregorius 761-762)
c. allen sînen degenen reden er verbôt / iht mit übermüete, des im wære leit. (Nibelungenlied 123: 2-3)
d. er sprach: „nû enist des niht rât, / ich enmüeze von iu scheiden.
(Gregorius 214-215)

- (2) a. daz ich sô sêre weine, des gêt mir wærfliche nôt. (Nibelungenlied 921: 4)
b. si empfiengen dâ genuoge, den sît leit von ir geschah. (Nibelungenlied 1341: 4)
c. ich unsæliher man, / daz sî mîn ouge ie gesach, / dô uns ze scheidenne geschach. (Iwein 328-330)
- (3) a. sus heter wünne unde nôt. (Iwein 1696)
b. des kom vrou Herzeloide in nôt, / si viel hin unversunnen. (Parzival 105, 6-7)

Aber auch im Mittelhochdeutschen war schon die Konstruktion mit dem Subjektnominativ als „Agens“ (der Handlungssatz) oder als „Zustands- / Vorgangsträger“ (der Zustands- oder Vorgangssatz) normal wie in (3). Jedoch begegnet man sehr oft in den mittelhochdeutschen Texten diese „unpersönlichen“ Vorgangssätze ohne Subjektnominative. Daraus lässt sich schließen, dass diese Sätze eine bestimmte Funktion in dem mittelhochdeutschen Satzbildungssystem leisten und als solche in der Grammatik behandelt werden sollten. Diesen Punkt berücksichtigend habe ich in dieser Arbeit versucht, die Funktionen dieser Vorgangssätze sowie der obliquen Kasus der „Person“ zu erklären.

Die Substantive ohne Artikel oder die *ze*-Infinitive funktionieren in den „Vorgangssätzen“ mit den Verben *sîn* / *werden* / *gân*, satzsemantisch betrachtet, als Prädikat wie *nôt sîn* / *nôt werden* / *nôt gân*. Dieses Prädikat braucht beim Prädizieren einen „Gegenstand der Prädikation“; diesen „Gegenstand der Prädikation“ stellen der Genitiv der „Sache“ oder der Dativ der „Person“ dar. Diese satzsemantische Konstruktion kann man im Vergleich mit den Sätzen mit Subjektnominativen wie in (4) feststellen.

- (4) a. dô sprach der fürste Sigmunt: „diu rede diu ist mir leit.
(Nibelungenlied 56: 1)
b. swâ ich gevolget ir bete, / daz enwart mir nie leit (Iwein 2020–2021)
c. herre, ez ist mîn rât daz ir sus einen arzât lât. (Erec 4616)

Aber wie in den obigen Beispielen findet man die Dative der „Person“ in den Sätzen, die schon Genitive oder Nominative als „Gegenstand der Prädikation“ enthalten. Dann sollte man diesen Dativ in solchen Sätzen wie in (1), (2) und (4) als den Kasus beurteilen, der eine andere Funktion als die des „Gegenstands der Prädikation“ leistet.

Der Kasus der „Person“, der meistens im Dativ, beim Prädikat *rât werden* im Genitiv wie im Satz „*iuwer wirt vil guot rât*“ (Armer Heinrich 917) und selten beim Prädikat *nôt gân* im Akkusativ wie im Satz „*des gie sî michel nôt*“ erscheint, hat eigentlich eine allgemeine Bedeutung wie der Dativ als „an dem Sachverhalt Beteiligter / (indirektes) Objekt“, der Genitiv als „zu etwas Gehörender / partitiv / (direktes) Objekt der Handlung“ und der Akkusativ als „(direktes) Objekt der Handlung“. Aufgrund dieser allgemeinen Bedeutungen wird dem obliquen Kasus nach der jeweiligen Satzkonstruktion eine Rolle oder Funktion in der Satzbildung zugeteilt. Der Dativ wie in den Sätzen mit den transitiven Verben *tuon / machen* usw. „*ir mugt mir dannoch vüegen nôt*“ (Parzival 136, 17) , „*sine tuont dir bî mir dehein leit*“ (Iwein 517) funktioniert als „Empfänger“ der Handlung. Diese Funktion als „Empfänger“ schien wahrscheinlich für den mittelhochdeutschen Sprecher auf die „Vorgangssätze“ anwendbar zu sein, obwohl in den „Vorgangssätzen“ kein „Agens / Täter“ erscheint. Satzbildungstheoretisch gesehen, wären die „Vorgangssätze“ ohne „Agens / Täter“ weiter dem Sprecher des Mittelhochdeutschen in dem Sinne sehr nützlich, dass er bei der Satzbildung auf den Dativ als „Sachverhaltsträger“

oder „Hauptperson“ fokussieren und damit den Satz als solchen darstellen kann, in dem dieser „Person“ ein unerwarteter Sachverhalt widerfährt. Diese Leistung des Dativs als „Empfänger“ und „Sachverhaltsträger“ und die Fokussierung auf diese „Person“ kann man auch in den Sätzen mit dem Genitiv der „Person“ und dem Akkusativ der „Person“ wie in den obigen Belegen erkennen. In diesem Sinne könnte man die Vorgangssätze mit dem obliquen Kasus der „Person“ für einen „Empfänger-bezogenen“ Satztyp im Mittelhochdeutschen halten.